

この地では改良型プラーガ「タイプ3」の实地試験を開始して1週間が経過した。
タイプ3は、これまでのプラーガではなしえなかった「身体能力の飛躍的向上」をコンセプトに作られた改良型である。
原種プラーガでも、支配種と呼ばれる特別なプラーガを使用すれば身体能力の飛躍的向上は見込める。

だが、支配種は絶対的に数が少なく、なによりも外見の劇的な変化を伴ってしまうため、状況によっては使いにくい。
それではダメだ。
我々が目指すのは、外見的な変化を伴わず超人的な身体能力を有する兵士を作りだすことなのだ。
それでこそ売り物になる。

別の研究チームでは、プラーガ以外を使用して似たようなコンセプトの商品を開発しているらしいが、
人間との親和性を考えれば、プラーガを使用するのが一番いい。
どんなに優れた兵士を生み出すことができても、定着率が悪ければ意味がない。

そこで我々は、従属種のプラーガ、いわゆる「普通の」プラーガに支配種プラーガの因子を移植することで、
新しいプラーガを開発することにした。
それが「プラーガ・タイプ3」である。タイプ3が完成すれば、生物兵器市場のトレンドを一気に塗り替えてしまうだろう。

だが、それは当分先の話のようだ。
今回の实地試験で、タイプ3の問題点がいくつか浮き彫りになった。

まず、定着率の低さ。
成人男性への定着率は92%と通常のプラーガ並みだったが、
女性と子供への定着率はほぼ0%だった。

これでは定着率の高いプラーガをベースに開発した意味がない。
また、外見的な変化も致命的だ。
体中のあらゆる部分に変化が見られた。
これは、支配種プラーガの因子が色濃く残りすぎているせいなのかもしれない。

だが、失敗ばかりではない。
目指していた身体能力の飛躍的向上については、ある程度達成されたと言ってもよい。
特に跳躍力については、目覚ましい進化をとげた。

予想外だった点としては、一部の被験者が巨大化したことだろう。
3メートル近くまで巨大化した者までいる。
これも支配種プラーガのせいだと考えられるが、まずは許容範囲内といえるだろう。

今回の实地試験は残念な結果に終わったが、完全な失敗だったわけではない。
失敗だったとしても、次に活かせばよいのだ。
まだ望みはある。